

学位授与番号：乙 3244 号

氏 名：鈴木 佳世

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 31 年 3 月 13 日

学位論文名：

**Impact of Surgical Staging in Stage I Clear Cell Adenocarcinoma of the Ovary.**

（I 期卵巣明細胞癌治療における系統的骨盤・傍大動脈リンパ節郭清を含む staging laparotomy と適切な手術進行期確定の重要性）

学位論文審査委員長：教授 矢永勝彦

学位論文審査委員：教授 柳澤裕之 教授 颯川晋

# 論文要旨

氏名	鈴木 佳世	指導教授名	岡本 愛光
----	-------	-------	-------

## 主論文

### Impact of Surgical Staging in Stage I Clear Cell Adenocarcinoma of the Ovary

(I 期卵巣明細胞癌治療における系統的骨盤・傍大動脈リンパ節郭清を含む staging laparotomy と適切な手術進行期確定の重要性)

Kayo Suzuki, Satoshi Takakura, Motoaki Saito, Asuka Morikawa, Jiro Suzuki, Kazuaki Takahashi, Chie Nagata, Nozomu Yanaiharu, Hiroshi Tanabe, Aikou Okamoto

International Journal of Gynecological Cancer. 2014 ; 24 : 1181-1189.

## 要旨

### 【背景・目的】

本研究の目的は、I 期卵巣明細胞癌治療における系統的骨盤・傍大動脈リンパ節郭清を含む staging laparotomy (optimal staging surgery) による適切な手術進行期確定の意義を検証することである。

### 【方法】

両側付属器摘出、子宮全摘、大網垂全摘、骨盤・傍大動脈リンパ節郭清、腹水/腹腔洗浄細胞診の全てを施行し手術進行期が確定された 80 例 (optimal 群) と、これらの一部の術式により手術進行期が確定された 84 例 (nonoptimal 群)、計 165 例の I 期卵巣明細胞癌患者の予後を後方視的に比較検討した。なお、手術進行期分類は FIGO 進行期分類を用い、IA 期は腫瘍が片側卵巣に限局し、被膜表面への浸潤がなく、腹水/腹腔洗浄細胞診陰性のもの、IC1 期は腫瘍が一側または両側卵巣に限局し術中被膜破綻したもの、IC2 期は自然被膜破綻または被膜表面への浸潤があるもの、IC3 期は腹水/腹腔洗浄細胞診陽性のものとする。

### 【結果】

本研究の追跡期間中央値は 67 か月であった。Optimal 群と nonoptimal 群の間で、無再発生存期間 (recurrence-free survival [RFS]) や全生存期間 (overall survival [OS]) に統計学的有意差は認められなかった (RFS:  $P=0.434$ ; OS:  $P=0.759$ )。5 年無再発生存率・全生存率は、IA/IC1 期症例で 92.1%・95.3%、IC2/IC3 期症例で 81.0%・83.7%であった。多変量解析では、IC2/IC3 期症例では IA/IC1 期症例に比べて RFS も OS も短く、予後不良なことが明らかになった (RFS:  $P=0.011$ ; OS:  $P=0.011$ )。本研究では、事前の計画により、IA/IC1 期症例と IC2/IC3 期症例の 2 つのサブグループでも解析を行ったところ、IA/IC1 期症例では RFS と OS 共に optimal 群と nonoptimal 群の間で統計学的有意差が認められたが (RFS:  $P=0.021$ ; OS:  $P=0.024$ )、IC2/IC3 期症例では認められなかった。多変量解析では、nonoptimal 群では optimal 群に比べて無再発期間が短いことが明らかになった ( $P=0.033$ )。

### 【結論】

IA/IC1 期卵巣明細胞癌患者の予後は良好であった。さらに、IA/IC1 期の卵巣明細胞癌患者では、系統的骨盤・傍大動脈リンパ節郭清を含む staging laparotomy の実施とそれによる適切な手術進行期確定が RFS における唯一の独立予後良好因子であった。

## 学位論文審査結果の要旨

鈴木佳世氏の学位請求論文は主論文 1 編 1 冊よりなり、主論文の題名は **Impact of Surgical Staging in Stage I Clear Cell Adenocarcinoma of the Ovary** (I 期卵巣明細胞癌治療における系統的骨盤・傍大動脈リンパ節郭清を含む staging laparotomy と適切な手術進行期確定の重要性) で、**International Journal of Gynecological Cancer** 誌に 2014 年に掲載されています。同雑誌の同年の **Impact Factor** は 1.958 です。指導教授は産婦人科の岡本愛光教授です。

平成 31 年 2 月 16 日に岡本教授ご臨席の下、柳澤裕之教授、颯川 晋教授と共に公開審査会を開催いたしました。審査では鈴木氏の主論文に関するプレゼンテーションの後、各審査委員と活発な質疑応答がなされました。代表的な質問は以下の通りです。

- ・子宮内膜症から卵巣明細胞癌が発生するメカニズムは何か
- ・皮膚がんでは紫外線という環境因子が癌化に関わっているが、どのような環境因子があると ARID1A 遺伝子に変異が起こって癌化するのか
- ・化学療法を行わなかった症例に関して、その理由は何か
- ・化学療法の施行の有無と進行期確定のための staging laparotomy 実施の有無に関連性はあったのか
- ・慈恵医大附属 4 病院間で予後などのデータに差はなかったか
- ・系統的骨盤・傍大動脈リンパ節郭清の合併症の頻度と施行の意義はどう考えるか

これらに対し、鈴木氏は自身の研究成果、ならびに過去の文献を元に適切に回答いたしました。

柳澤・颯川両審査委員と慎重審議の上、本委員会として学位論文として十分な価値があるものと認定いたしました。